認め合い、支え合う学級生活を築く児童の育成

－学級活動における、自己肯定感を高める振り返りと、他者理解を深める話合い活動を通して－

川崎町立富岡小学校　　和田　惇平

１　はじめに

(1) 授業実践上の課題

４月から、認め合い、支え合う児童の育成を目指し、学年の活動だけではなく異学年との交流活動でも、自分たちの役割や相手を尊重する大切さを指導してきた。異学年と交流する活動では、目的意識を持って活動を行い、良好な関わり方について考えることができた。一方で、学級内の仲間との関わり方においては、活動後の成長についてそれぞれ認め合う姿が見られたが、活動の過程における一人一人の成長や努力に気付き認め合うことが十分ではなかった。また、価値観の相違から「ずるい」「おかしい」との不満をため、仲たがいしてしまうことが多く見られた。その都度、個別や集団で指導したが、教師の価値観の教え込みになってしまい、児童が他者を理解しようとする力の醸成にはつながらなかった。

(2) 児童の実態

本研究の対象である第４学年児童10名の実態を客観的な指標から捉えるために、下記の項目で、自己肯定感と他者理解についての意識調査を行った。

表１　自己肯定感と他者理解に関する意識調査結果

（令和７年５月20日実施　※各質問１点（否定）～４点（肯定）で回答）　　ｎ＝10

項目	学級平均	範囲
自己肯定感を測る質問（５問）	14.6点	５～20点
他者理解を測る質問（７問）	22.3点	７～28点

意識調査の結果から、自分の行動や考えに自信が持てない傾向にある児童が複数いることが分かった。それらの児童への追跡調査から「他者に合わせることへの過剰な意識」や「仲間外れにされたくないという不安」があることが分かった。これらは、自信のなさや失敗への恐れとして表れていることが考えられる。このことから日常の生活を通して他者から認められる、尊重される人間関係を育むことで、一人一人の自己肯定感が高まり、よりよい学級生活を築けるようになるのではないかと考える。一方で、他者理解について問う質問では、肯定的に回答している児童が多かった。このことから、児童が「他者の気持ちを考えること」や「他者の意見を聞くこと」といった、他者理解の基礎的な面については、ある程度意識できていることがうかがえる。相手の苦手なことや不安に思っている心情等についても、広く理解していくことで、更に他者理解の質を高めることができると考える。

(3) 研究主題について

上記のことを踏まえ、互いに認め合い、支え合う学級生活を築いていくために、自己の行動に自信を持ち、相手に対しても広い視野で理解しようとする児童の育成を目指し、本研究の主題を設定した。

２　研究の目的と方法

(1) 研究の目的

自己肯定感を高める振り返りと、他者理解を深める話合いの活動を通して、認め合い、支え合う学級生活を築く児童の育成を目指す。

(2) 研究の方法

研究主題に迫るため、以下の視点に基づく手立てを講じて授業実践を行い、授業後に児童の学習記録や意識調査の結果から検証する。

①　自己肯定感を高める振り返りに関わる工夫

教師が児童の普段の生活を見取り、人間関係に起因する課題を取り上げ、課題解決に向けた目標設定→実践→振り返り→目標再設定という一連のサイクルを振り返りに焦点を当てて回していくことで、児童の自己肯定感を高める。(このサイクルを「振り返りのサイクル」と本研究では捉える。)目標設定では、他者との対話を通して自己の課題に気付かせる過程を経ることで、自己を深く見詰め直し、自己を成長させる目標設定へと導く。実践中は、成果や課題について記録できるワークシートを準備し、常に目が届くよう掲示する。自己の行動について適宜振り返ったり他者からの評価を受け入れたりしながら目標を再設定できるようにする。このような振り返りのサイクルを、日常的に繰り返させていくことで、自己肯定感の向上を図っていく。

②　多様な価値観や考えを認め合う話合い活動の工夫

話合い活動では、他者が抱えている課題に対してその理由や背景についても理解することで多様な考えや価値観を受容できるようにする。そのために、話合いの前に、可能な限り自己開示させる。同時に、理由や背景について理解する大切さについて指導していく。しかし、自分をふかんしながら自己開示することが難しい児童もいることが予想される。そこで、教師による補助発問を行うことで、自己の内面

を深く捉えることができるようにする。これを継続しながら、児童同士でも問い合えるように、問い合うポイントを示しながら話合いを行わせる。さらに、話合いのルールを設定し、ルールの意味や必要性を価値付けすることにより、安心して意見や考えを伝え合える基盤をつくっていく。

３　授業実践Ｉの結果と考察

(1) 実践内容の概要

実践日	令和７年６月30日（月）６校時
題材名	「授業の不安を解決しよう大作戦！」学級活動（２）イ　よりよい人間関係の形成
ねらい	話合い活動を通して係活動を振り返り、自己や友達の変容や努力、思いに気付き、次の課題に向けて新たな目標を立て、解決しようとする意欲を高める。

事前の活動では、「学びに関する意識調査結果」を示し、授業中の友達との関わり方の課題を共有した上で、個々の目標設定を行った。

(2) 研究に関わる実践の詳細

①　自己肯定感を高める振り返りの工夫

授業の不安を無くすために立てた目標に向かって、授業中の友達との関わり方を改善する活動に取り組ませた。実践中は、ほぼ毎日、自己と友達との関わり方を振り返り、その記録を蓄積することで本時の振り返り時の自己評価に役立てるようにした。本時での振り返りでは、自分の行動について点数化し、その点数にした理由を考えられるようにした。また、振り返りの蓄積が他者と共有できるようなワークシートにした。課題を捉え、目標を設定し、振り返りを通して目標を再設定するサイクルを、題材を通して３回繰り返すことで、成長している自分に気付くように工夫した。また、２、３回目の振り返り時には互いの成長や努力について気付いたことをカードに書き、渡し合うという活動を設けることで、多角的に自己の成長に気付けるようにした。

①　多様な価値観や考えを認め合う話合い活動の工夫

「してもらって嬉しいこと」や「されて嫌なこと」は人によって違うということを事前の活動で伝えた上で、それを知る手段が自己開示や対話であるということに気付かせた。話合い活動では、教師による補助発問を行い、自己の内面を見詰め、自己開示ができるようにした。また、話合いの際には、聞く側、話す側のルールを提示し、どの児童も安心して話合いに参加できるようにした。

(3) 成果

①　自己肯定感を高める振り返りの工夫

ワークシートを掲示することで、自己の目標に照らした自己の行動の振り返りを常時行い、記録を蓄積することができた（図１）。この振り返りの蓄積により、本時の総括的な振り返り活動では、他者との振り返りによって自己の変容を捉え、自己を肯定的に捉える様子が見られた。さらに、振り返りの際に、互いを認め合うカードを渡し合ったことで「がんばりに気付いてくれてうれしい」など、成長や努力を他者に認めてもらえることが、多角的な自己肯定感の高まりにつながった。

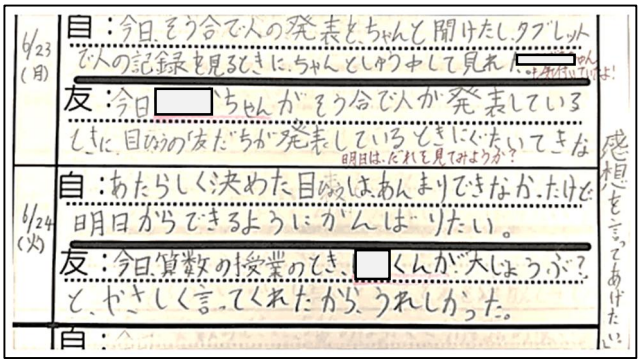

図１　児童が記入した実践の振り返り

②　多様な価値観や考えを認め合う話合い活動の工夫

自己開示する大切さや他者の行動の背景を知る大切さを伝えたことで、全ての児童が自己開示することができた。自己開示することができたことで、話合いを通して他者の考えについて深く知ることができた。また、話合いの際には、「どうしてそうしたの？」「それは誰のためになるの？」など、自己の内面に問い掛けさせる補助発問をしたことで、一人一人がどのような思いで課題を認識しているのかについて共有することができた。

(4) 課題

①　自己肯定感を高める振り返りの工夫

他者との対話を通した他者からの評価を生かした振り返りは充実していたが、自分で自己の活動を内省する自己評価の充実が不十分であった。また、実践中に、「目標を意識することができなかった」といった反省も見られた。ワークシートの構成や掲示の仕方を見直し、視覚的に捉えやすくし、常に目標を意識させ自己評価ができるように工夫が必要である。さらに、質の高い目標を持てるよう、児童の価値観を広げる工夫が必要であるため、本学級の児童の憧れである上学年の考えや姿に触れさせていく。

②　多様な価値観や考えを認め合う話合い活動の工夫

自己開示ができるよう、児童の思考を揺さぶる補助発問を試みたが、多くの場面で補助発問を投げ掛け過ぎてしまい、児童の思考を混乱させてしまった。また、教師の意図した思考に導くような恣意的な発問にもなってしまった。補助発問を投げ掛ける場面の精選と、どのような意図や言葉で補助発問を投げ掛けるのか、再検討する必要がある。また、児童同士が補助発問のような問い掛け合いが行えるように、

問い掛けの意図と仕方を助言していく。

４　授業実践Ⅱの結果と考察

(1) 実践内容の概要

実践日	令和７年10月24日（金）５校時
題材名	「係活動をステップアップしよう！」学級活動（３）イ　社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解
ねらい	話合い活動を通して実践を振り返り、自己や友達の変容や努力、思いに気付き、次の課題に向けて新たな目標を立て、解決しようとする意欲を高める。

事前の活動では、身近な憧れである上級生の係活動に関する意識調査の結果から、個々の目標を設定し、活動に取り組んだ。

(2) 研究に関わる実践の詳細

①　自己肯定感を高める振り返りに関わる工夫

実践Ⅰ同様に、自己理解を深め、成長や努力に気付くために振り返りのサイクルを繰り返し行い、振り返りの記録の蓄積を行った。また、振り返り時には互いの成長や努力について気付いたことを書くカードを渡し合うことで多角的に自己の成長に気付けるようにした。本時では、実践Ⅰの課題を踏まえ、課題を自分自身の問題として捉えるために、事前の活動において「係活動を通してなりたい自分」の姿を考えさせた。本時の総括的な振り返り活動では、達成度を表すメーターを塗り理由を考えることで、自己を見詰め課題を明確にするようにした。また、児童が振り返りのサイクルの中で自己の成長について捉えやすくするために、目標、振り返り、目標再設定を段階的に捉えられるような、ワークシートを作成した。さらに、学習過程の「さぐる」段階では、上級生の係活動に関するインタビュー動画を視聴させることで、課題解決方法を広い視野で探ることができるようにした。

②　多様な価値観や考えを認め合う話合い活動の工夫

活動前には、係活動について自己開示し、一人一人が抱えている係活動の不安や悩みを話し合わせた。話合いを通して、その不安や悩みが解決すると学級がどうなるか考えさせることで、一人一人が課題を解決しようとする意欲を高めることができるようにした。実践Ⅰでの課題を踏まえ、計画的な補助発問の投げ掛けをした。「さぐる」段階では、児童が取り組みたい目標についてグループで話し合う際に「それが解決できたらなりたい自分にどれだけ近付くだろうか」と、補助発問することで、その目標の必要性についてグループで深く考えられるようにした。また、児童同士でも他者の考えの理由や背景に迫っていけるように、その重要性を伝えた上で簡単な問い返しの仕方を指導した。さらに、実践Ⅰから話合いのルールを児童と共に見直したものを示し、どの児童も安心して話合いに参加できるようにした。

(3) 成果

①　自己肯定感を高める振り返りの工夫

自分自身の成長を実感する姿が多数見られた。課題を自分自身の問題として捉えたことで振り返りの質が向上したことが要因であると考える。また、振り返りのサイクルを段階的に捉えるためのワークシートの工夫を行ったことで、より高みを目指す目標設定につながり、自己の成長や変化が見られた。振り返り時には目標にどれだけ近付けたかについてワークシートのメーターを塗り、理由について考える活動を取り入れたことで課題意識を持って実践に取り組み、自己の変容に気付かせることができた。

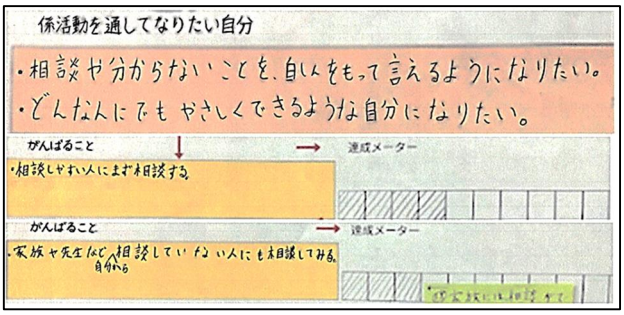

図２　児童が記入したワークシート

②　多様な価値観や考えを認め合う話合い活動の工夫

児童同士の話合いの際に、補助発問を意図的に行ったことで、深く考えるきっかけを与えることができた。また、あらかじめ補助発問を分類したことで、予測していなかった児童の発言に対しても「それは本当に必要かな」「誰のためのルールなのだろうか」と補助発問を行うことができ、自他の考えの真意について深く考えさせることができた。また、話し合う際の留意点を確認したことで、どの児童も安心して話し合うことができた。

(4) 課題

①　自己肯定感を高める振り返りの工夫

授業の始めに考えた自己の課題を付箋に書き残しておくことを活動に取り入れなかったために、自己の課題に対する解決方法を探るという本来のねらいからずれてしまう場面があった。本時では、上級生のインタビュー動画を見せてから、グループでの話合いを行ったが、上級生の印象強い言葉が児童の考えに影響を与え過ぎてしまった。グループでの話合いを先に行うことで、解決したい課題を明確にし、その方法を探る手立てとしてより有効にインタビュー動画を活用できたと考える。

②　多様な価値観や考えを認め合う話合い活動の工夫

本時では、補助発問を分類し意図して指導過程に位置付けたことで、考えの理由を明確にしたり価値観を揺さぶったりすることができた一方で、教師の

一言が大きく影響し過ぎてしまうと感じることがあった。教師の補助発問は最低限にし、児童同士で問い返しを行うようにすることで支え合い認め合う関係作りが高まると考える。

５　おわりに

(1) 意識調査の結果から

表２　意識調査の変化

（令和７年11月4日実施　※各質問１点（否定）～４点（肯定）で回答）　ｎ＝10

項目	５月	11月
自己肯定感を測る質問（５問）	14.6点	17.1点
項他者理解を測る質問（７問）	22.3点	24.5点

自己肯定感を測る質問では、５月と比べて2.5ポイント増加した。これは、児童にとって課題を自分自身の問題として捉えられる題材を設定し、振り返りのサイクルの中で他者との対話を通し、自己を深く見詰め、自己を成長させる目標を設定したことで、充実した実践につながり、振り返りを通して自己の成長に気付くことができたと考える。また、他者から認めてもらったことで、より自己肯定感を高めた要因になったと考える。

他者理解を測る質問では、５月と比べて2.2ポイント増加した。自己開示の大切さを指導したことで、どの児童も自己開示することができた。また、教師の補助発問により、他者が抱えていた本当の思いに気付いたことが他者理解を深めた要因になったと考える。

(2) 研究の成果と課題（成果〇、課題●）

〇　目標設定→実践→振り返り→目標再設定の振り返りのサイクルを繰り返し、振り返りの記録の蓄積を行い、自己を深く見詰めたことで、自己を深く成長させる目標設定ができ、充実した活動につながった。また、このような活動を自己評価や他者との対話を通して振り返りを行ったことで、児童は成長した自分や努力を積み重ねた自分に気付き自信を持つことができた。

〇　話合いの前に自己開示を取り入れたことで、それまで固定された価値観で捉えていた他者の思いを捉え直すことができた。また、教師が意図的な補助発問をすることにより児童同士では気付くことのできなかった、一人一人の不安や思い込みの理由や背景に深く迫ることができた。

●　２回の授業実践を通して、多様な価値観があるということに気付かせることができた。しかし、まだまだ様々な場面や状況において異なる意見を受容できず仲間外れにされる不安を感じている児童は少なからずいる。今後も継続して今回の実践で学んだことを様々な場面で応用できるように実感を伴った他者理解の指導を続けていく必要がある。

●　補助発問を分類したり、指導過程に意図的に位置付けたりしたが、多用しすぎることで、教師の一言が大きく影響してしまい、教師の意図した思考になるような恣意的な傾向になることがあった。また、児童の自主的な思考を邪魔してしまい不安を与えてしまうこともあった。今後は補助発問のタイミングや言葉の吟味を行うとともに、児童自ら気付いたときには価値付けを行うことで、自分たちで他者理解を深めていけるようにする。

(3) まとめ

自己肯定感を高め、他者理解を深める振り返りと話合い活動を通して、認め合い、支え合う学級生活を築く児童の育成を目指してきた。課題を自分自身の問題として捉え自己を見詰め、具体的な目標や手立てを考える振り返りの工夫や、一人一人の考えは異なるということを理解し、行動の理由や背景に迫っていく話し合い活動の工夫、この２つの視点を基に、目標設定→実践→振り返り→目標再設定といった振り返りのサイクルを繰り返し行った。その振り返りのサイクルの中で、自己の成長や努力に気付くことで児童の自己肯定感が高まり、他者についても理解しようとする心が育まれ、互いに認め合い支え合えると考える。また、それらは学級活動だけにとどまらず学校生活全体において継続的に行う重要性を感じた。

今後も、今回の研究の成果や課題を基に、実践を継続していくことで児童一人一人の自己肯定感や他者理解の向上を図っていきたい。そのために、児童の自発的な行動を価値付けながら主体的な学級づくりができるよう支援していく。

【引用・参考文献】
１）文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成29年告示）特別活動編」
２）国立教育政策研究所教育課程研究センター（2018）「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）

【図表等の許諾について】
図１、図２は児童が記入したワークシートや振り返りの記述の一部である。氏名や個人が特定されるものは掲載せず、研究の目的にのみ使用することとし、児童の保護者及び所属校長から使用許諾を得た。